

Absentiv,あるいは「不在構文」について

池 内 宣 夫

Über den Absentiv

IKEUCHI, Nobuo

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第34巻第1号

2012年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 34, No. 1, April 2012

OITA, JAPAN

Absentiv, あるいは「不在構文」について

池 内 宣 夫*

【要 旨】 Absentiv 〈sein + 不定詞〉に関する研究においては多くの問題が未解明のまま残っている。その一つが, Absentiv の形式と意味はどのように動機づけられているのかであり, いま一つが, 不定詞の補足語として指示的な名詞句がどの程度可能かという問題である。

本稿では, Absentiv における補足語の現れ方を中心に考察し, それが名詞化不定詞に近いことを指摘する。さらに, Absentiv が同じく「進行形的構文」であり, 意味的にも用法的にも近い 〈sein + am 不定詞〉に動機づけられている可能性を検証する。

【キーワード】 Absentiv 進行形 不定詞

はじめに

現代ドイツ語の口語的語法として, (1) のような sein と不定詞による構文が存在する。

- (1) a. Anna ist einkaufen.
- b. Anna war einkaufen.

(1) では「Anna は買い物に行って, 不在である (不在であった)」という内容が表わされており, Absentiv と呼ばれる。Absentiv という概念を導入した de Groot (2000) によると, Absentiv は多くのヨーロッパの言語において認められるとされる¹⁾。

この〈sein + 不定詞〉という統語的にも意味的にも「奇妙な」構文は, 当然のことながら研究者たちの関心を集めてきた。しかし, Absentiv は特定の言語レジスターに集中してみられる言語現象であることもあり, まだ研究の歴史も浅く, 十分に考察されていない問題が多くある。

本稿では, Absentiv が表す「不在」とは何か, Absentiv はどのように説明されるのかについて先行研究の知見を批判的に検討した上で, Absentiv の意味的・統語的特徴について考察する。とりわけ, 不定詞の補足語の現れ方に注目し, Absentiv の形成・制約要因を明らかにすることを目的とする。

I Absentiv とは

de Groot (2000) は Absentiv を規定する特徴として「不在 (Absence)」、「遠隔 (Remoteness)」、「期間 (Duration)」を挙げている。

Absence とは、主語の〈人〉が「直示的中心 (deictic center)」において不在であることと規定される。直示的中心とは通常は話し手のいる場所であるが、必ずしもそうとは限らない。それは、話し手と聞き手の関心の向けられている地点（あるいは「話題の地点 (Topikort)」）である。例えば (1) は、Anna が彼女の自宅において不在であることを、彼女の自宅以外の場所にいる話し手が報告している場合もありうる。また、主語が一人称の場合の (2) を見られたい。

- (2) „Wo bist du jetzt?“ — „Ich bin jetzt einkaufen.“

(2) は例えば外出中の「私」が携帯電話などで居場所を伝えるときの会話である。(2) の場合、話し手である主語は話し手がいることが期待される自宅において不在であることを表している。

Absentiv が実際に不在を表すのかについて興味深い調査がある。König (2009) はある人物が不在であることを伝える状況を設定し、どの程度 Absentiv が用いられるかについてインフォーマントテストを行っている。その一つに「同じ WG (住居共同体) に住んでいる Peter がパンを買いに出かけたあと、Peter の友人から電話があった場合、どのように答えるか」という設問がある。その結果を (3) に示す。

- (3) a. Peter ist nicht da. Er ist heute ausnahmsweise mal Brötchen holen. ----100%
 b. Peter ist nicht da. Er ist heute ausnahmsweise mal am Brötchenholen. ---0%
 (König, 2009: 73f.)

(3.b) の〈sein + am 不定詞〉は現代ドイツ語の話しことばにおいて多くみられる「進行形的」構文である（これについては後述する）。(3) では、インフォーマント全員が Absentiv を選択している。

次に、Remoteness と Duration について考える。Remoteness とは、主語の〈人〉が直示的中心から離れた場所にあること、そして Duration とは、その不在が一定時間継続することを意味する。Remotenes については、de Groot (2000) は (4) を挙げ²⁾、聞き手は「Hans が Hans の自宅等以外の場所でシャワーを浴びている」と理解するとする。

- (4) Hans ist duschen.

この点に関しても、König (2009) では興味深いインフォーマントテストの結果が出ている。「同じ WG に住み、台所で料理をしている Peter にその友人から電話があった場合、どのように答えるか」という設問では、(5) のような結果になった。

- (5) a. Peter kann gerade nicht, der ist am Kochen. -----83.3%

- b. Peter kann gerade nicht, der ist kochen. -----13.4%

(König, 2009: 72f.)

(5) は主語の〈人〉が直示的中心からさほど離れていない場所にいるという状況である。確かに 83.3% が「進行形」を選択しているが、それでも Absentiv を選択した割合も 13.4% ある。もっとも、主語の〈人〉が直示的中心のごく近接領域にいる場合、Absentiv は用いられない。König (2009) によれば、「Peter が話し手のすぐ隣にいて本を読んでいる」場合には (6) の結果となる。

- (6) a. Ich gebe ihn dir, er sitzt neben mir und ist am Lesen. -----96.7%

- b. Ich gebe ihn dir, er sitzt neben mir und ist lesen. -----0%

(König, 2009: 74)

以上のことから、Absentiv においては主語の〈人〉が直示的中心において不在であることが表されるが、直示的中心からの距離の大小は二次的なものであると考えられる。実際、ウェブ上には (7) のような事例が多く観察される³⁾。

- (7) a. Heute in der Badewanne hat er (in einem unbeobachteten Moment, denn ich war gerade kochen) das Julialied angestimmt.

(www.parents.at/archive/index.php/t-518631-p-8.html)

- b. Ich komme gerade aus dem Garten, war Unkraut jäten.

(www.tengo-online.de/?q=content/café-bubble-0&page=5)

- c. ... rief er von der Terrassentür [sic!] — er war gerade rauchen.

(forum.dnd-gate.de/index.php?topic=12639.0:wap2)

(7) では、主語の〈人〉は不在ではあったが、すべて自宅内あるいはその近辺におり、(5) とほぼ同じ状況と考えられる。

Absentiv が典型的には「外出を伴う活動」による不在を表すことがしばしば指摘される⁴⁾。その限りにおいて、Remoteness は Absentiv の典型的な特徴の一つであることは間違いない。他方では、(7) のような事例が観察されることから Absentiv の用法が拡大しつつあるのかもしれない。

同じ理由から、Duration も Absentiv の典型的な用法にみられる特徴ではあっても Absentiv に固有の特徴とは言いがたい。Absentiv が表すのは、主語である〈人〉が「今（あるいは基準時に）」不在であるということであり、その不在がどれだけの期間続くかは、不定詞によって表される、典型的には「外出を伴う活動」についての「知識」に関することである。なお、Absentiv においては、不定詞が表す活動だけではなく、その活動と結びついているすべての活動に従事する時間が不在の期間に含まれるとされる⁵⁾。例えば (8) では、自宅を出てからサッカーをして帰宅するまでの時間が不在の期間に含まれる。

- (8) Peter ist Fußball spielen.

つまり、(8) では Peter は「今」必ずしもサッカーをしている必要はない。これは上でみたすべての Absentiv の事例についても言えることであり、Absentiv を〈sein + am 不定詞〉から区別する特徴である⁶⁾。

II Absentiv を説明する試み

Absentiv の由来を巡っては、以下の 3 つの説が代表的である。

2.1 gegangen 省略説

この説は、Absentiv は完了形の gegangen が省略されたものとみるものである。

- (9) a. Anna ist einkaufen [gegangen].
b. Anna war einkaufen [gegangen].

この説は、〈sein + 不定詞〉に関する通時的研究において多くの研究者 (Dal, Grimm, Holmberg など) によって唱えられているものである。完了形における gegangen の省略は Absentiv 以外にもみられる。

- (10) a. Er ist ins Büro [gegangen].
b. Er ist nach Hause [gegangen].

この説に対して、完了形と Absentiv は意味が違うことがしばしば指摘されることがある。例えば (9) について言えば、完了形では「買い物に行く」という行為が過去のある時点において行われたことが表されているが、主語 Anna の発話時 (基準時) における「不在」が必ずしも表されているわけではない。また、Absentiv が状態表現 (Stativ) であるのに対し、完了形は出来事表現 (Eventiv) であることもしばしば反論として持ち出される。(11) を参照のこと。

- (11) a. Anna ist seit zwei Stunden einkaufen.
b. ?Anna ist seit zwei Stunden einkaufen gegangen.

しかし、このことはまさしく Absentiv が完了形に関連づけられる (動機づけられる) ことを示すものに他ならない。Absentiv と完了形の間には、後者が動作の完了を表しているのに対し、前者はそれによってもたらされた結果状態としての主語の〈人〉の「不在」を表しているという関連性がある。つまり、Absentiv と完了形は同じ事象の異なる側面 (アスペクト) を表している。そのような関連性は、状態受動と動作受動の間にも認められる。

- (12) a. Der Computer ist ausgeschaltet.
b. Der Computer ist ausgeschaltet worden.

なお, *gegangen* 省略説に近い見解は Abraham (2007) においてみられる。ただし, Abraham は表層において *gegangen* の省略を考えるのではなく, 基底に [(*weg*)*gegangen*] という述語を想定し, そこから「不在」を導こうとする。

2.2 場所規定省略説

この説は, Absentiv を場所規定を含む文と関連づけ, そこから場所規定が省略されたとみるものである。

- (13) a. Anna ist [in der Stadt] einkaufen.
b. Anna war [in der Stadt] einkaufen.

例えば König (2009) は, 場所規定が省略された場合, [nicht am Topikort] という場所規定が暗示されるとする。しかし, これについてはさらに説明が必要であろう。筆者は, 場所規定省略説を「同格的不定詞句 (Apposition)」と関連づけて説明したい。同格的不定詞句とは, 主文の内容に「目的」などを補足するために後置される不定詞句であり, ふつうは主文とコンマによって区切られる。

- (14) a. Anna ist in der Stadt, einkaufen.
b. Anna war in der Stadt, einkaufen.

同格的不定詞句はドイツ語において広く見られ, また主文は位置表現には限定されない。

- (15) a. Zweimal die Woche geht Lene zu einer Therapeutin, das Selbstgefühl steigern. (Spiegel 2001/21: 108)
b. Suzanne Konzack lässt die Teller erst einmal stehen und geht vor die Tür, eine rauchen. (Spiegel 2010/10: 62)

同格的不定詞句は主文の内容を補足するものであるから, (14) はあくまでも位置表現 (Anna ist (war) in der Stadt.) である。つまり, (14) ではあくまで「Anna が街にいる (いた)」ということが述べられているだけであり, そこには「不在」の意味は必ずしもあるわけではない。しかし, (14) が「Anna の不在」を伝えるために「用いられる」ことはある。

- (16) „Ist Anna nicht da?“ — „Sie ist in der Stadt, einkaufen.“

(16) では, 「Anna が街にいる」ことを述べるにより「Anna の不在」を伝えようとしている。

このように考えれば, 場所規定が実現されない場合には, それが語用論的に意味をもつ場合として主語の〈人〉の「不在」が導き出せることになる。なお, Absentiv に無音の述語 (*weg*; (英) *out, off* など) を想定する方向も同様の考え方に基づく。

2.3 〈gehen + 不定詞〉との平行説

この説では、Absentiv は〈gehen + 不定詞〉との平行性ゆえにこれをモデルとして形成されたものとする。

- (17) a. Anna geht (ging) einkaufen.
b. Anna ist (war) einkaufen.

上の gegangen 省略説では、Absentiv を〈gehen + 不定詞〉の完了形と関連づけ、それが含意する結果状態としての主語の〈人〉の「不在」を導こうとしているのに対し、〈gehen + 不定詞〉との平行説では、gehen と sein がパラディグマの関係にあることから「不在」を説明しようとする⁷⁾。例えば König (2009) は、〈gehen + 不定詞〉における gehen とは違い、〈sein + 不定詞〉の sein には「不在」の意味は固有にあるのではなく、それは〈gehen + 不定詞〉とのパラディグマの関係においてもたらされるとする。

III Absentiv の統語的・意味的特徴

Absentiv に関しては、十分に考察されていない問題が多くある。その一つに Absentiv の形成要因と制約要因がある。

3.1 動詞の意味クラスについて

Absentiv は、動作主性が高く、継続的な動詞で可能であることは、研究者の見解が一致するところである。ここで、動作主性が高い動詞とは、主語である〈人〉が「意図的に、少なくとも意識的に、また能動的に行う行為⁸⁾」を表す動詞である。逆に、動作主性が低い動詞において Absentiv は不可能であるとされる。(18) は授与動詞の例である。

- (18) *Hans ist Geschenke kriegen. (de Groot, 2000: 705)

以上のことは、Absentiv に関する実証的研究によっても明らかになっている。Krause (2001) のコーパスに基づく調査では、Absentiv は 26 の動詞で 42 件の事例が検出されているが、そのうち 35 例 (81.4%) が「活動動詞 (Activities)」に分類される。活動動詞とは Vendler (1967) の分類であり、[継続性 (durativ)], [動作性 (dynamisch)], [非完結性 (atelic)] という意味素性によって特徴づけられる動詞である。その主なものを (19) に挙げる。

- (19) essen, kochen, kegeln, laufen, putzen, schwimmen, tanzen, telefonieren, duschen, spazieren, (Tennis) spielen, surfen, arbeiten, baden など

König (2009) のコーパス調査では、Absentiv は 41 の動詞において検出されている。König は動詞の分類を行っていないが、その大半が活動動詞によって占められている。(20) は頻度順に上位 15 位までを並べたものである。

- (20) einkaufen(196), essen(75), spazieren(65), arbeiten(46), schwimmen(33),
baden(26), trinken(23), wandern(22), joggen(18), wählen(18), tanzen(14),
angeln(10), fischen(10), holen(9), fahren(8)

なお、(20)の括弧内の数字は事案件数を表している⁹⁾。これをみると、事例の多くが少数の動詞に偏っていることがわかる。

活動動詞以外の動詞がどの程度 Absentiv において可能であるかについては、十分に検証されていない。活動動詞以外の動詞とは、上述の Vendler (1967) の分類に従えば「達成動詞 (Accomplishments)」, 「到達動詞 (Achievements)」である。前者は「継続性 (durativ)」, 「動作性 (dynamisch)」, 「完結性 (telisch)」によって特徴づけられる動詞、後者は「瞬時性 (punktuell)」, 「動作性 (dynamisch)」, 「完結性 (telisch)」によって特徴づけられる動詞である。Krause (2001) によれば、前者では 5 件 (11.6%)、後者では 2 件 (4.7%) が確認されるという。しかし、達成動詞の 5 例のうち 4 例は einkaufen (とその方言的変種 einkoofen) の事例であり、その einkaufen を達成動詞とみなすこと自体についても問題がある。einkaufen は、少なくともその典型的な用法においては、個々の (完結的な) 購買行為よりもむしろ「ショッピングをする」であり、活動動詞的であるとみなせよう¹⁰⁾。次に、到達動詞の事例を (21) に挙げる。

- (21) a. mein mann und die Kinder sind beeren pflücken im Wald.
b. Warst du platten kaufen?

(Krause, 2001: 126)

一方、König (2009) では 41 の動詞中に 10 弱の達成・到達動詞¹¹⁾が認められる。それらは、holen, tanken, einzahlen, sammeln, vorstellen, wechseln などである。このうち、holen が 9 件である他は、すべて 2 例もしくは 1 例のみという低い出現頻度となっている。

以上のように、Absentiv がどの程度まで達成・到達動詞において可能であるかについては、該当事例が少なく、検証は難しい。Krause (2001: 218) のように、該当事例が少ないことから、達成・到達動詞による Absentiv は (活動動詞のそれに対して) 有標であると言うことはできるかもしれない。しかし、Absentiv の表す意味との整合性の観点からみれば、達成・到達動詞が Absentiv で現れにくいと考える理由はない。達成動詞は「完結性」によって、到達動詞は「完結性」と「瞬時性」によって活動動詞から区別されるが、上述したように Absentiv では不定詞によって表される行為だけではなく、その前後の行程にあることまでを含めて「不在」の意味が表されるため、「完結性」と「瞬時性」そのものが制約要因となるとは考えにくい。なお、König (2009) では比較的多くの holen の事例が確認されているが、それは holen では前後の行程がその意味に含まれており (「行って買って (取って) 来る」) Absentiv になじみやすいからとも言える。(3.a) を (22) に再掲する。

- (22) Peter ist nicht da. Er ist heute ausnahmsweise mal Brötchen holen. (=3.a)

3.2 補足語について

活動動詞と達成・到達動詞の違いの一つとして、補足語 (*Ergänzung*) の有無・種類が挙げられる。活動動詞は典型的には自動詞、あるいは補足語をとらない他動詞の用法であるのに対し、達成・到達動詞には他動詞で補足語を取るものが多い。これを (23) の例で示す。

- (23) a. Er liest.
b. Er liest die Mail.

(23.a) では非完結的な行為が、(23.b) では完結的な行為（メールを読み終えた時点で「メールを読む」という行為は完結する）が表されている。前者は活動動詞、後者は達成動詞である。

この動詞のクラスと補足語の関係は Krause (2001) の調査結果にも現れている。それによれば、Absentiv の事例 42 件のうち 30 件 (71.4%) は補足語を伴わない。4 格の名詞を補足語として取る事例は (24) に挙げる 4 例¹²⁾にすぎない。

- (24) a. mein mann und die Kinder sind beeren pflücken im Wald. (= 21.a)
b. Warst du platten kaufen? (= 21.b)
c. Ich bin jetzt gerade einen hirsch schießen.
d. Ich bin erst mal wäsche machen.

(Krause, 2001: 126f.)

活動動詞の (24.d) を除き¹³⁾、補足語を取る事例すべてが達成・到達動詞である。

さて、これらの補足語の現れ方に注目してみる。Krause (2001: 126) は (24.a), (24.b) について、「助動詞 (sein — 筆者注) と補足語が直接接触しているという Absentiv の構造ゆえに、抱合された (inkorporiert) 補足語と抱合されていない補足語の判別は難しい」と言う¹⁴⁾。「抱合 (Inkorporierung)」とは、動詞と補足語などが密接な関係にあり、通常一語書きされることを言う。(25) を参照のこと。

- (25) a. Monika ist tennisspielen.
b. D ist dann mal wech ... mittagessen und arbeiten.

(Krause, 2001: 139)

Krause (2001: 126) はその判別が難しい理由として、補足語が複数で不定的 (nicht-definit) であることを挙げる。これについては、(26) の名詞化不定詞との関係を考えてみればよい。

- (26) a. X pflückt Beeren. → (das) Beerenpflücken
b. X kauft eine Platte. → (das) Plattenkaufen

名詞化不定詞においては、その補足語はしばしば複数の形を取る。しかし、それがカテゴリーとしての数を表しているわけではない。それと同様に、(24.b) の複数形 *platten* は単数形に對立しているとは限らない。実際に、Krause (2001: 233) は (24.b) について、レコードを買い

に行って戻ってきた姉に妹が発した文であるが、買ってきたのは1枚であった、と述べている。
さて、補足語の抱合は〈sein + am 不定詞〉における原則である。

- (27) a. Anna sucht Pilze. → Anna war am Pilzesuchen.
b. Otto putzt die Küche. → Otto ist am Küchenputzen.

(Ebert, 1996: 45)

Ebert (1996: 45)によれば、抱合が起こるのは、補足語が「非指示的 (non-referential)」あるいは「弱指示的 (weakly referential)」の場合とする。ここでは、「非指示的」、「弱指示的」を名詞句が具体的・個別的な事物を指示していない、あるいはそのように使われているわけではないとの意で理解しておく。

IV Absentiv を巡る諸問題

以上において、Absentiv に関していくつかの新しい問題点が明らかになった。それらは、① 補足語の指示性の問題、そして ② 〈sein + am 不定詞〉との関係である。

4.1 補足語の指示性の問題

補足語に現れる名詞句の指示性はどのように Absentiv の形成に関わっているのだろうか。筆者は、König (2009) において比較的多くの事例が確認されている達成・到達動詞 *holen* とその類義語である *kaufen* についてウェブ上を検索し、補足語に現れる名詞句における冠詞などの限定詞の有無に着目した¹⁵⁾。

検索の結果、最も多いのは *Brötchen/ Zigaretten/ Bier ... holen (kaufen)* のような補足語が可算名詞複数でゼロ冠詞、あるいは不可算名詞でゼロ冠詞の事例、すなわち (24.a), (24.b) タイプの事例であった。

一方、冠詞などの限定詞の有無が問題となる可算名詞で単数である補足語については、限定詞を伴う事例 (28) も、伴わない事例 (29) も確認できる。

- (28) a. Ich war gerade das telefon holen!
(www.fritz.de/media/studiocam/index.html)
b. Heute bin ich zu müde. War in der Bank mein Arbeitszeugnis holen, somit mein letzter Besuch im Betrieb.
(www.steirerbua.at/burnout-meine-odyssee/burnout-bei-männern)
c. so, ich war gerade einen Augenbrauenstift kaufen.
(www.bfriends.brigitte.de/foren/hautpflege-und-kosmetik/)
(29) a. Bald ist Weihnachten, ich war gerade Geschenk kaufen.
(www.jds-rap-blog.de/2009/12/16/j-d-maeckes-copy-and-paste-love-tua-remix-download/)
b. ... hat mich jemand beim rückwärts ausparken leicht am spoiler und an der stosstange [sic!] tuschiert. ich war gerade parkschein holen.

(www.cruiserforum.de/bb/print.php?threadid=6293)

- c. War gerade neue Batterie kaufen und habe die Alte prüfen lassen: Eine Zelle defekt!!

(www.7-forum.com/forum/18/starter-batterie-regenerieren-16307-4.html)

以上の結果から、補足語に現れる名詞句の指示性は Absentiv の形成に関わる要因ではないと言えよう。しかし、(29) のような本来冠詞等が必要とされるにもかかわらずゼロ冠詞となっている事例が確認されることは、Absentiv において補足語が実際に、Ebert 流に言えば、非(弱)指示的でありうることを示している。

4.2 〈sein + am 不定詞〉との関係

〈sein + am 不定詞〉は「ライン方言進行形 (rheinische Verlaufsform)」と呼ばれ、方言的語法とされているが、その使用はドイツ語圏の広い範囲で増えつつあり¹⁶⁾、また口語のみならず、書きことばにおいても用いられるとされる¹⁷⁾。〈sein + am 不定詞〉は現代ドイツ語において、まさに「進行形」へと発達を遂げつつある。

Absentiv と〈sein + am 不定詞〉はそれが表す意味において、また不定詞に現れる動詞の意味クラスにおいて異なる。まず、第 1 章で指摘した Absentiv の(典型的な)特徴とされる Remoteness, Duration は〈sein + am 不定詞〉にはない。Remoteness に関しては (6) を参照のこと。Duration に関しては (8) でも触れたが、(30) で再確認しておきたい。

- (30) a. Peter ist am Fußballspielen.
b. Peter ist Fußball spielen. (= 8)

(30.a) では「サッカーをしている」ことのみが表されているのに対し、(30.b) では「サッカーをしに行く途中(そこから帰る途中)にある」ことも表される。

また、動詞の意味クラスに関しては、〈sein + am 不定詞〉は動作主性の低い動詞や瞬間的な動詞でも可能である。

- (31) a. Das Wasser war am Kochen. (Ebert, 1996: 46)
b. Als seine Frau anrief, war Otto schon am Einschlafen. (Ebert, 1996: 45)

このような違いはあるが、Absentiv と〈sein + am 不定詞〉は共に進行形的構文であり、次のような関係がある。一方では、Absentiv の表す「不在」はある行為に「従事している」ことの結果であり、他方では、〈sein + am 不定詞〉によって表される、ある行為に「従事している」から、その結果としての主語である〈人〉の「不在」が含意される。同じ状況が〈sein + am 不定詞〉によっても Absentiv によっても伝えられる場合があることは、第 1 章の (5) でみたとおりである。同じく第 1 章で、Absentiv を特徴づけるとされる Remoteness, Duration があくまでも相対的なものであることも指摘した。これらのことから、この両構文はそれほど厳密には使い分けられていないと考えられる。

さて、〈sein + am 不定詞〉の補足語については、抱合が原則であるとした。また、抱合され

る補足語は、Ebert (1996) によれば、非（弱）指示的であるとされることが述べた。しかし、〈sein + am 不定詞〉では抱合は名詞句の指示性以前に統語的理由によることは明らかである。すなわち、前置詞の目的語の位置におかれるため、補足語は不定詞に抱合されざるを得ない（名詞化不定詞となる）。その限りにおいて、Ebert (1996) の言う「非（弱）指示性」は抱合の理由ではなく、結果である。例えば (27.b) では、die Küche を指示的とする解釈は当然可能であり、非（弱）指示的であるから抱合された（Küchenputzen）とは言えない。名詞化不定詞になることにより非（弱）指示的となったのである。

ここで、Absentiv における補足語の現れ方に再び目を向けてみる。(29) のような補足語に現れる名詞句が可算名詞・単数でありながらゼロ冠詞となっている事例があり、それぞれの名詞句は非（弱）指示的であるとした。しかし、そのような名詞句の用法はドイツ語の規範から外れるものであり、それゆえ、（それが単なる「乱れ」でなければ）名詞化不定詞的なものとして用いられていると考えざるを得ない。他方では、Absentiv においては〈sein + am 不定詞〉のような名詞化不定詞への統語的要請がない。これらのことは、Absentiv は〈sein + am 不定詞〉によって形式的に動機づけられている可能性を示唆している。それはまた、次のような再帰的な不定詞を含む場合においても検証できる。

- (32) a. Sie ist gerade am Umziehen.
 b. Er war gerade am Zähneputzen.
 (33) a. Sie ist gerade umziehen.
 b. Er war gerade Zähne putzen.

(32) の〈sein + am 不定詞〉と (33) の Absentiv においては本来現れるべき再帰代名詞 sich が現れていない。〈sein + am 不定詞〉においては、これは名詞化不定詞であるためと説明できる。(34) を参照のこと。

- (34) a. Schon das Umziehen ist für meine alte Mutter ein Problem.
 b. Sie bringt ihrem Kind das Zähneputzen bei.

しかし、Absentiv については、この現象は〈sein + am 不定詞〉と関連づけることによるのみ説明可能である。

因みに、(33) のような Absentiv の事例には、第2章で取り上げた説のどれも説明を与えることはできない。例えば、〈gehen + 不定詞〉では再帰代名詞は実現されなければならない。

- (35) a. Sie geht sich umziehen.
 b. Er ging sich die Zähne putzen.

おわりに

以上で、Absentiv について、補足語の現れ方の問題と〈sein + am 不定詞〉との関係を中心に考察した。以下にその結果をまとめる。

Absentiv において補足語が不定詞に抱合されている可能性が指摘されることから、補足語に現れる名詞句は指示性が低く、不定詞が表す行為と意味的に一つのまとまりを成していると考えられることもできる。しかし、Absentiv における補足語の現れ方はむしろ名詞化不定詞に近い。この点において、〈sein + am 不定詞〉との関連性が認められる。

Absentiv と〈sein + am 不定詞〉はともに進行形的構文として交替してきたという歴史もある¹⁸⁾。今日においても、この両構文は意味的・用法的に類似性を示しており、Absentiv と〈sein + am 不定詞〉が平行的に発達してきた可能性はある。

ただし、Absentiv において指示的な名詞句が観察されることもまた事実である。それを新しい発達とみるのか、〈gehen + 不定詞〉との平行性の表れとみるのかについてはなお考察が必要である。

Absentiv の由来を巡って複数の説があるように、Absentiv はさまざまな構文から動機づけられていると考えるのが妥当である。ある構文が複数の構文に動機づけられている場合があることは、Behagel の「構文混淆 (Konstruktionsmischung)」を持ち出すまでもなく、しばしばみられることである。その意味において、Absentiv における補足語の現れ方はこの構文の由来に関して新たな問題を提起するものとなる。

註

- 1) ドイツ語、フィンランド語、フリージア語、イタリア語、オランダ語、ノルウェー語、スウェーデン語、ハンガリー語。なお、Vogel (2007) によれば、de Groot の挙げる 8 言語を含む 28 の言語で Absentiv が認められるとする。
- 2) de Groot (2000: 698f.). ただし、例はスウェーデン語 (John är och duschar.).
- 3) “sein の活用形 gerade 不定詞” でウェブ上を検索した。
- 4) König (2009: 48) 参照。
- 5) de Groot (2000: 700f.).
- 6) König (2009: 45f.), Ebert (1996: 47) 参照。
- 7) Vogel (2007) は、gegangen 省略説が「構造的省略 (konstruktionelle Ellipse)」を想定するのに対して、この説は「観念的省略 (konzeptionelle Ellipse)」を想定するとする。
- 8) König (2009: 48).
- 9) 数字は筆者が分布図より読み取った事例件数で概数。
- 10) これは Krause (2001: 218) 自身も認めている。
- 11) 達成動詞と到達動詞は厳密に区別することは難しいため、多くの研究で採られている「達成・到達動詞」という分類法を用いる。
- 12) 本来は 5 例。しかしそのうちの 1 例は同格的不定詞句のため除外した。
- 13) Krause によれば、wäsche machen は機能動詞句。
- 14) (24.c) では抱合はない。なお、これは「先史時代における架空の置手紙の例」として被験者が作った文である (Krause, 2001: 126)。
- 15) もちろん、これは便宜的な基準であり、指示性は限定詞の有無によって必ずしも測られるわけではない。
- 16) Thieroff (1992) 参照。
- 17) Ebert (1996) や Thiel (2008) 参照。
- 18) Vogel (2007: 274) によれば、〈sein + 不定詞〉(ただし「不在」を表していたかどうかは不明) は 17 世紀に一旦消失し、〈sein + am 不定詞〉と交替した、とされる。

参考文献

- Abraham, Werner (2007): *Absent arguments on the Absentive: An exercise in silent syntax. Grammatical category or just pragmatic interference?* In: Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik 45. pp.3-16.
- Ebert, Karen H. (1996): *Progressive Aspect in German and Dutch*. In: Interdisciplinary journal for Germanic languages and semiotic analysis 1,1. pp.41-62.
- de Groot, Casper (2000): *The absentive*. In: Dahl, Ö.(Hg.): *Tense and Aspect in the Languages of Europe*. pp.693-719, Berlin, New York.
- König, Svenja (2009): *Alle sind Deutschland ... außer Fritz Eckenga – der ist einkaufen! Der Absentiv in der deutschen Gegenwartssprache*. In: Winkler (Hg.): *Konstruktionelle Varianz bei Verben*. (=Opal-Sonderheft 4) pp.42-74, Mannheim.
- Krause, Olaf (2001): *Progressive Verbalkonstruktionen im Deutschen, Ein korpusbasierter Sprachvergleich mit dem Niederländischen und dem Englischen*. Hannover (Dissertation).
- Thiel, Barbara (2008): *Das deutsche Progressiv: neue Struktur in altem Kontext*. In: Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht 13:2.
- Thieroff, Rolf (1992): *Das finite Verb im Deutschen, Tempus–Modus–Distanz*. (Studien zur deutschen Grammatik 40), Tübingen.
- Vogel, Petra M. (2007): *Anna ist essen! Neue Überlegungen zum Absentiv*. In: Geist, L./ Rothstein, B. (Hg.): *Kopulaverben und Kopulasätze*. pp.253-284. Niemeyer (Linguistische Arbeiten 512), Tübingen.

Über den Absentiv

IKEUCHI, Nobuo

Abstract

In den Forschungen über den Absentiv bleiben nicht wenige Fragen ungeklärt. Eine davon ist, woher der Absentiv motiviert ist, und eine andere ist, ob und inwieweit referentielle NPs als Ergänzungen vorkommen. Krause (2001) spricht von der Möglichkeit einer Inkorporierung in Sätzen wie *Sie sind Beeren pflücken.; Warst du Platten kaufen?* Und tatsächlich lassen sich im Web zahlreiche Belege finden, wo zählbare Nomen ohne Artikel gebraucht werden. Ebert (1996) weist im Zusammenhang mit der „Progressivform“ <sein + am Infinitiv> darauf hin, dass nicht-referentielle bzw. wenig referentielle Ergänzungen in den Infinitiv inkorporiert werden (*Sie sind am Pilzesuchen.; Er ist am Küchenputzen.*). Es liegt jedoch auf der Hand, dass es sich dort bei den inkorporierten Ergänzungen um substantivierte Infinitive handelt und somit die Inkorporierung syntaktisch bedingt ist. Dass auch beim

Absentiv, wo kein solcher syntaktischer „Zwang“ besteht, Ergänzungen inkorporiert erscheinen, lässt darauf schließen, dass der Absentiv, der ohnehin semantisch dem Progressiv recht nah ist, auch formal von ihm motiviert sein kann.

【Key words】 Absentiv, Progressiv, Infinitiv